

よりよい音楽表現を求めて主体的に見方・考え方を働かせる児童の育成

—題材を貫く音楽的要素と教師の関わり方に着目して—

千葉市立北貝塚小学校 教諭 山本 陽

《研究の概要》

音楽科の授業において、児童の学びの意識は読譜などの知識や音楽表現の技能に集中し、表現できる・できないを意識するあまり自らの力で課題を見つけて活動に取り組むことが少ないという課題がある。そこで、児童が自らの音楽的な見方・考え方を働かせて学びを深めていける姿を目指し、「指導計画の立案」と「思考を動かす教師の関わり方」を視点に授業改善を行った。その結果、児童の思考に寄り添って教師が手立てを講じるとき、児童が自らの力で音楽的な見方・考え方を働かせ音楽表現に向かうようになるということが分かった。また、課題意識をもって活動する児童の姿が見られるようになった。

1 問題の所在

「千葉市学校教育の課題 21世紀を拓く」では、音楽科において、「題材を通して付けたい力、本時の目標を明確にし、一人一人が見通しをもって主体的に表現や鑑賞の幅広い活動に取り組めるようにする。」ことが示されている。また、「小学校学習指導要領解説音楽編」では、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することを掲げている。

文部科学省教科調査官志民（2020）は、音楽の活動が制限される中で、現状で何ができるかを考えることに止まるのではなく、その活動によって何を学ぶのかという、育成を目指す資質・能力と結び付けて考えることが不可欠であると示している。

以上を踏まえて児童に「音楽は何を学ぶ教科だと思うか」についてアンケートを取ったところ、「楽譜の記号や楽器、歌唱の表現技能である」と答えた児童の割合が4年生以上で47.4%に上り、自分の思いを音や音楽でどう表現するか考える思考力など他のどの回答よりも多かった。また、学んだことを主体的に生かして音楽表現を追究することに対しては、学年が進むにつれて難しいと感じている児童が増える傾向にあった。

これらのことから、児童が音楽的な知識や技能に対する苦手意識にとらわれず、自らの力をどのように生かしたらよいかを考えて学びを深められるよう授業改善すれば、児童自身の表現の追究につながると考えた。

そこで、主となる音楽的な要素を柱として表現や鑑賞の各領域を貫いて題材を設定し、児童の具体的な姿や発言から課題を生成したり教師が価値付けを行ったりする。そうすることで、学びの視点が題材を貫く要素に焦点化され、児童がよりよい音楽表現を求めて主体的に見方・考え方を働かせるようになると考えた。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

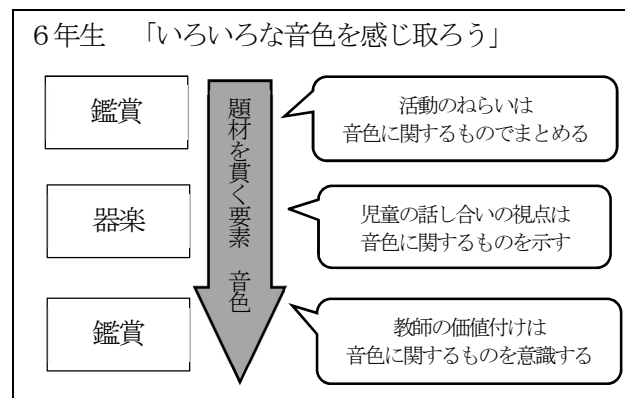
①「指導計画」と②「思考を動かす教師の関わり方」を視点に授業改善を行い、自らの力で音楽的な見方・考え方を働かせ音楽表現に向かう児童の育成を図る。

(2) 研究の方法

- ①指導計画の立案
- ②思考を動かす教師の関わり方を視点とした授業実践
- ③指導の要点の分析・考察

3 研究の内容

(1) 指導計画の立案



〔図1〕 題材設定のイメージ

[図1]のような想定で、表現領域や鑑賞領域の様々な活動を、音楽的な要素で貫いて設定する。

(2) 授業実践

3年生から6年生までの各学年において、題材の指導計画と児童の思考を動かす教師の関わり方を視点に実践を行った。ここでは主に6年生の活動について述べる。

① 題材名 いろいろな和音のひびきを感じ取ろう

	活動の概要 (題材を貫く要素: 和音)
1時	『星の世界』の旋律を知る 伴奏の和音を知る
2時	主な旋律と副次的な旋律を重ねる
3時	和音の響きやその移り変わりを感じ取る
4時	短調の和音の響きを知る
5時	ハ長調のI-IV-V-Iの和音の響きを知る
6時	和音に含まれる音を使って旋律をつくる
7時	つくった旋律を聴き合う

[資料1] 指導計画と題材の活動

ここでは、和音とその構成音を知り、和音の移り変わりを音楽表現に生かすことをねらいとした。そして、本題材における音楽的な見方・考え方を働かせる児童の姿を、「既習の和音の響きや構成音、和音のつながりを意識して、音楽表現を工夫しようとしたり関連する言葉を用いて話し合ったり感想を書いたりする姿」と想定した。

題材の指導計画の立案にあたっては、児童自身の力で学び進めることができるよう、領域を貫いて児童の学びの視点を和音の響きに向けることで、音楽表現の追究につながれると考えた。そこで、[資料1]のような流れを設定しつつ、児童の姿や発言などから各時間の課題を設定していくこととした。具体的には、1音ずつ重ねて曲の伴奏をする。そこで和音の響きや和音を構成している音について学んだ後に、声を重ねて和音をつくる。最後に、和音の構成音を生かして音楽づくりに取り組む。という流れである。

活動に際しても、「和音の響き」や「和音の構成音」を柱に毎時間のねらいを設定していった。また、授業の導入部分や活動が変わるタイミングなどで前時の活動を取り上げ、「揃えて演奏していた和音をずらすとどうなるだろう。」「楽器でやったことを声でもやってみ

よう。」のように、前時との関連を体験的に結び付けられるようにした。

ア 1時～3時 器楽・歌唱

ハ長調の楽曲「星の世界」から、似ているフレーズに使われている伴奏が同じような響きの繰り返しになっていることを聴き取った。和音を構成する音を確認する場では、トーンチャイムを用いて音が重なり合う響きを感じ取り、ハ長調のI、IV、Vの3つの和音を学んだ。曲に合わせて演奏すると、主旋律と重なり合った響きや伴奏をずらしたときの違和感を発表した。

その後、楽器の音色を参考に、自分たちの声を重ねる活動を行った。事前にトーンチャイムの響きを感じ取っていたため、和音の響きをイメージして声を重ねようとした。

イ 4時 器楽

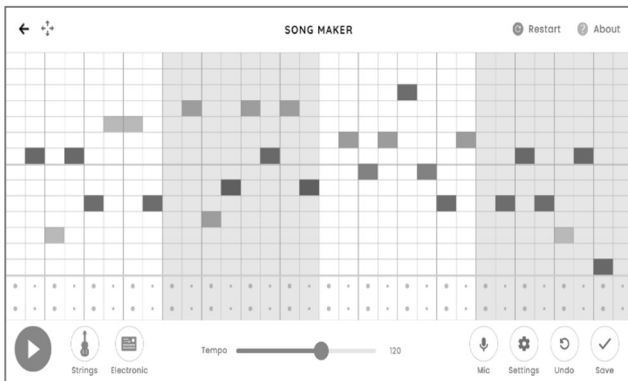
短調の響きが伴奏に使われている楽曲を導入し、長調との構成音の違いを学んで、響きの違いを感じ取った。前時までの活動との関連を図り、トーンチャイムや自分の声で和音の響きを体験的に確認する場を設けた。児童は、既習の活動内容を話題に挙げながら、「雨の歌」を聴いたり演奏したりした。楽曲を聴いた初発の感想から、「暗い感じ」「悲しい曲」「途中から明るくなった。(長調にか変わった)」と感想を述べた。

ウ 5時～7時 音楽づくり

和音を構成する音やその移り変わりを理解した上で、ハ長調のI-IV-V-Iの和音進行を伴奏にした旋律づくりを行った。活動に際しては、表現技能への苦手意識を軽減して、和音の構成音を意識した旋律づくりに向かわせたいと考え、1人1台タブレットPC(以下ギガタブという)上で使える「Google music lab」内の「Song maker」を利用した。各和音に使われている音を色で確認することができ、手軽に再生・確認・修正ができるため、児童は自分が納得する作品になるまで、繰り返し聴き直しながら旋律をつくっていった。

完成した作品はギガタブ上で公開し合い、お互いの作品を聴き、感想を伝え合ったり友達の作品を編曲したりしていた。[資料2]のように、和音に含まれる音が視覚的にも確認できるため、児童同士が話し合う際

に、色を話題に挙げながら使われている音を説明していた。



〔資料2〕 児童の旋律づくりの作品

エ 実践の考察

題材の活動終了時には、児童は以下のように振り返った。

- ・楽器（トーンチャイム）の音がきれいに重なっていた①。
- ・自分の声だと難しかったけど、きれいに重なるといい感じになる②。
- ・どの音を入れてもきれいに重なった③から、すごく気持ちよかった。
- ・音が決まっていたから、（旋律を）どんな形にしようか考えやすかった④。
- ・和音の音をいろいろ考えて試してということを繰り返し⑤で旋律をつくるのが楽しかったです。

〔資料3〕 和音の響きに関する児童の振り返り（抜粋）

伴奏に使われている和音の響きを感じ取る場では、歌唱の活動に消極的な児童も積極的に声を発し、友達との声の重なりを聴き取ろうとする姿が見られた。これは、楽器の音色から音の響きを体感した上で声を重ねる活動に移ったことで、具体的な音のイメージをもったまま自分と友達の声の響きを判断することができたためであると考えられる。〔資料3〕の記述からも、指導計画の工夫が児童の視点を和音の響きに向けられることができたと考えられる（下線部①②）。

また、短調の響きを感じ取ることについては、長調の和音を聴いたり声に出したりした後に楽曲を導入したため、響きの違いから和音を構成している音の違いにスムーズに目が向き、使われている音の違いに気付いたと考える。

音楽づくりにおいては、楽器の響きや声で十分に和音の響きに親しんだ状態で活動をつなげたため、児童は和音の響きを意識して旋律をつくっていたと考える

〔資料3〕下線部③④⑤。題材を貫く要素を意識して各時間の課題や活動を組むことで、その要素に向かって児童の思考を深めることができるとわかった。

歌唱から器楽への移行については、曲を聴いたり楽器の響きを感じ取ったりして和音の響きに十分触れさせ、児童は友達と重ねるなどして工夫していくことで学びが深まり、教師もその姿を捉えて価値付けができた。つまり、同一の教材を扱い歌唱のための器楽を行ったり、教材を変える際に既習の活動を発展させるように関連付けたりすることで、児童の学びの視点を自然と和音の響きに向けさせ、児童が自らの力で学びを深めることができたと考える。

- ・全部のマスと並べられてよかった。
- ・楽器の音が変わられて楽しかった。バイオリンの音がいいと思いました。
- ・三角や丸の音（リズム打楽器の音色）を考えるのに専念した。
- ・テンポを上げると気に入った。

〔資料4〕 和音の響きから離れた児童の振り返り（抜粋）

しかし、音楽づくりへの移行については〔資料4〕の児童の振り返りからも、児童の視点は打楽器のリズム操作や速度のコントロールに集中するなど、和音の響きを十分に意識したもたばかりではなくなっていたと推察する。その要因としては、活動の隔たりが大きかったのではないかと想定した。つまり、ギガタブでのアプリ操作で行う音楽づくりの目新しさや音の響きが生の楽器の音と遠かったことなどが児童の視点を和音の響きから遠ざけたのだと考えた。

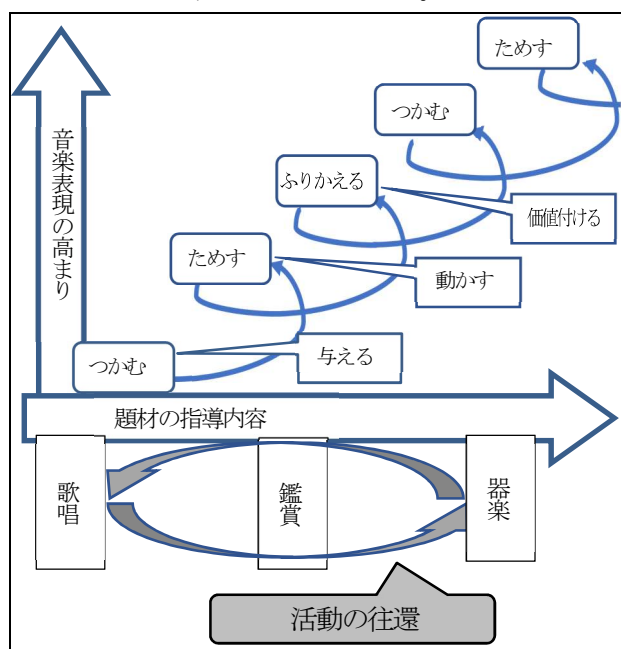
これは、他の学年においても題材によって多少はありながら、同様の姿が見られた。具体的には、中学年の実践で旋律の特徴に意識が向かずリコーダーや歌唱を繰り返すばかりだったり、5年生の実践で友達と合奏することに時間を費やし表現の工夫に目が向かなかったりする姿が見られた。

そこで各領域の活動を、音楽を形づくっている要素で貫くことを推し進めて、さらに細かく活動を設定した。そうすることで、児童の思考の流れを題材のねらいに向かわせられるようになり、児童自らの力で題材の学びを深めていけると考えた。

また、第一次実践を振り返り新たな実践の活動を計

画していくと、各活動が何のための活動であるかをより意識する必要が出てきた。「楽譜の導入は早めてスムーズな読譜につなげたい。」「鑑賞は自分なりの視点をもって曲を味わえるようにしたい。」「やはり楽器の練習期間を確保したい。」などのように、題材の学びに向かえるよう活動の設定をしていくためには、領域を超えて各活動の内容を細分化して配置していく必要があるのではないかと考えた。つまり、モジュール化した活動の連携が有効ではないかと想定した。

さらに、教師側の関わり方についても、モジュール化した各活動の目的や児童の学びがどのように深まっているかを意識されていることが重要であると考えた。児童が「今どんなことを考えているか」「何を試そうとしているのか」等、具体的な姿に対して言葉かけをして思考を活性化させていけば、児童自身の力で学びを深めていけるようになる想定した。



【図2】 学びの深まりを意識した題材設定のイメージ

そこで、児童が題材の課題と出会い、試行錯誤しながら表現を追究していく際の思考過程を、「(知識・技能を) つかむ」「(学んだことを) ためす」「(自分の表現を) ふりかえる」のスパイラルであると想定し、教師の関わり方を見直していった。思考の各段階での教師の言葉かけや手立ての意図を、「(知識・技能を) 与える」「(思考を) 動かす」「(児童の姿を) 価値付ける」と分類して、何のための手立て・発言であるかを意識

して題材の指導にあたった場合の児童の様子を省察していった（[図2]）。

②題材名 曲想の変化を感じ取ろう

活動の概要（題材を貫く要素：変化）	
1時	歌唱導入 主な旋律を知る
2時	歌唱 表現を工夫する 鑑賞導入 変化を感じ取る
3時	歌唱 まとめ 鑑賞 変化の要因を考える 器楽 導入
4時	鑑賞 味わって聴く 器楽 パートの役割を知る
5時	器楽 グループで演奏する 中間発表
6時	器楽 表現の工夫を考えて演奏する
7時	器楽 合奏を聴き合う

【資料5】 指導計画と題材の活動

ここでは、曲想の変化に気付いて音楽的な要素と結び付けて理解し、自分の音楽表現に生かすことをねらいとした。そして、本題材における音楽的な見方・考え方を働かせる児童の姿を「いろいろな音楽を形づくっている要素が一体となって醸し出す曲想を捉え、各要素やそれらの働きなどを根拠に話し合ったり感想をまとめたりする姿」「曲想の変化に関わる要素に気付き、音楽表現を工夫する姿」と想定した。

児童が題材の学習内容に向かって表現を追究していくように、題材内の表現や鑑賞の各領域の活動を細かくモジュール化して往還できるよう活動を設定した。加えて、各活動において児童の思考過程を想定した手立てを検討して指導に組み込むことを考えた。

また、題材全体のねらいに向かって活動ができるよう、楽曲の導入を早めたりICT機器を活用した読譜を進めたりすることを取り入れて指導計画を立案した。

ア 1時～2時 主に歌唱

題材の導入部に歌唱の活動を位置付けた。1時では、曲想の変化を感じ取って旋律の特徴などに気付き、歌唱表現を工夫することをねらった。まずは児童が楽曲を聴き、感じ取ったことを発表し合った。その際、児童へ知識を与えることを念頭に、旋律の特徴や伴奏の音色の変化などの要素で児童の発言を整理した。徐々に、自分が感じ取った変化の根拠がスムーズに発表できるようになった。

2時では歌唱表現の工夫を考えさせた。児童は、範唱CDを参考にして歌い試した。ここでは、具体的な

児童の姿から「なぜ今のような工夫をしたのか。」「どんなことを考えたのか。」など、表現の工夫の根拠を問うことで児童の思考を動かし、表現と要素を結び付けて価値付けた。児童は、「リズムがゆったりしたから。」

「音が高くなる場所は強くしてみようと思った。」のように、自分なりの言葉で音楽的な要素と関連付けて説明した。

イ 3時～4時 主に鑑賞

旋律の特徴から曲想の変化を歌に生かす活動から、「楽器が増えたらどんな変化が生まれるだろう。」と投げかけ、オーケストラの鑑賞を行った。ここでは、まず拍に合わせて体を動かす活動を行い、曲想の変化と速度の関連を聴き取らせた。その後、動きの変化をとらえて、その根拠を問うことで児童の思考を動かし、曲想の変化とリズムや旋律との関わりに気付かせた。直前に歌唱表現の工夫についてリズムや旋律などの音楽的な要素の特徴を振り返った児童は、動きが変化した理由について各要素の変化を根拠に説明した。

A児 次はゆらゆらでしょ。
 B児 あのゆったりになるところね。
 A児 その後、急にジャンってなるから準備していないと合わなくなるよね。
 教師 今、次の動きを見通して動きを変える準備をしていましたね。どんな準備をしていましたか。
 C児 びたっと止まって腕の準備をしていました。
 D児 軽くジャンプしていたよ。
 教師 どうしてそんな準備が必要なのでしょう。
 C児 急に強い音になって、細かい（リズムの）ところに入るからです。

【資料6】動きを見合う児童の会話

鑑賞のまとめでは、[資料6]のように児童は友達同士でお互いの動きを見合ったり教師に動きの変化の理由を問われたりしながら、楽曲と音楽的な要素の変化を整理した。曲想が変化する前に次の動きに備える姿が見られ、曲想の変化を見通す姿が見て取ることができた。

ウ 5時～7時 主に器楽

鑑賞で曲想の変化を理解した児童に、「自分たちだったらどんなことができるだろう。」と投げかけ、器楽の活動に移っていった。[資料7]のように範奏CDを聴いた初発の感想から、前半と後半の曲想の違いやその理由が挙げられた。教師は児童の発言を音楽的な要素

で整理して価値付けた。

その後の合奏においても、グループ内で曲想の変化を根拠にパート分けをしたり、演奏方法の相談をしたりする姿が見られた（[資料8、9]）。

E児 低音パートは入った方がまとまるよ。
 F児 前半と後半であまりリズムが変わらないね。
 E児 その分、弾き方で工夫しないとためなんじゃない？
 教師 どうしてそう思ったの？
 G児 曲の感じが変わるからね。
 E児 主旋律はリズムが変わるからパートごとの強弱を変えようかな。
 教師 なるほど。目立たせたい楽器を変えろということだね。
 G児 ハンガリー（鑑賞教材）と一緒にことね。

【資料7】パートの相談をしている児童の会話



後半の方が滑らかになるんだから、やわらかく弾くといいよ。



最初のリズムが細かいところは短く区切って強くしたいね。

【写真8、9】表現の工夫をアドバイスし合う児童

演奏を発表し合う場では、他のグループの音楽表現の工夫に気づき、曲想の変化に関わる旋律と音色、リズムと強弱といった要素の働きを根拠に感想を伝えたり振り返りをまとめたりした。

エ 実践の考察

- ・リコーダーが鍵盤ハーモニカに変わっているのが印象に残ったので頑張りました。
- ・楽器の特徴とパートの特徴を合わせるといいと思いました。課題を少しは考えられました。
- ・曲想にあっているかを考えて、旋律にあった楽器を選べました。

【資料10】題材全体のふりかえり（抜粋）

[資料10]のように題材の締めくくりの振り返りでは、曲想の変化と音色や旋律、強弱に関する内容を結

び付けたと考えられるものが見られた。活動をモジュール化して配置し、領域を往還しながら学習を進めることで、児童の視点を曲想の変化とそこに関わる要素に向けられた結果だと考える。焦点化された要素は、その後の試行錯誤へもつながっていたと考える。

4 研究のまとめ

(1) 成果

- ・パートの役割や旋律の特徴を確かめ、改善したほうがいいところを考えられた。
- ・課題を考えた方がやりやすいから、自分に合ってやりやすい課題になるようにした。
- ・他の人を意識して合わせることを学び、一人一人のレベルアップも意識できた。

[資料11] 実践後の児童の振り返り (抜粋)

[資料11] の記述からは、音楽的な要素を根拠に自らの課題を意識できるようになったとうかがえる。また、自分にとって必要な課題を選択することで課題意識をもって活動できたり、友達や自分の技能的な高まりを認められるようになったりしたと考えられる記述も見られた。

自分で課題を見つけて活動できますか (%)				
	できる	ややできる	あまりできない	できない
7月	3.3	45.4	47.1	4.3
1月	17.2	53.3	26.2	3.3

[資料12] 課題を見付けることに対する比較

[資料12] の結果から、児童の思考に寄り添い、教師が意図をもって手立てを講じるとき、児童が自らの力で音楽的な見方・考え方を働かせ音楽表現に向かうようになるということが分かった。

そのためには、以下のような学習の過程を意識して指導していく必要があると分かった。

つかむ

授業の導入部に限らず、題材の中でモジュール化された活動を見通す場として設定する。児童は、自分の知識・技能を見直し、できそうなことを考え始める。

その際、教師は知識・技能の伝達に偏らず、児童に必要感や目的意識をもたせるための課題設定や発問を心がける。例えば、既習の活動との関連を図ったり、スモールステップを示して試しの活動を体験させたりすることなどが考えられる。そうすることで、音楽的

な知識量や表現技能の巧拙ばかりを意識することなく、児童自身の力で活動に取り組めるようになったり、新たな知識・技能の獲得に向かったりすると考える。

ためす

活動の中で、知識・技能をどのように生かすか考える場として設定する。ここでは、児童は活動のねらいに向かって自らの考えを生かして様々に表現する。

教師は、児童の思考を支援する。指導用CDや友達の様子など他者の音楽表現を参考にさせたり、児童への価値付けからの延長で次にできそうなことを問いかけたりしながら、児童の思考を動かしていくことが重要である。

ふりかえる

自分の考えが表現できたかどうか判断するための場として設定する。児童は、自分が試そうとしていたことに基づいて、できばえを確かめる。ここで一連の思考は一段落するが、新たな課題をつかんだりその解決方法を試したりするようになっていく。

教師は、児童が自然と変化させたような音楽表現や具体的な姿を見逃さず、その価値を伝えることを心がける。ここでは、活動のねらいが明確になっていて、児童と共有されている必要があり、即応的に児童の姿や表現の変化を見取る目とそれを価値付けして伝える言葉が重要となる。

(2) 課題

今回の実践では、各学年で1つの題材を取り上げることで授業改善の要点を明らかにしてきた。しかし、児童の思考がスパイラル状に深まっていくことを踏まえ、学年や題材を越えた授業改善を求めていく必要がある。

実践を積み、更なる授業改善の視点を探り、児童がよりよい音楽表現を求めて主体的に見方・考え方を働かせることができるよう、今後も研究を続けたい。

主な参考文献

- 志民一成「資質・能力の育成に向けた題材構想の考え方」『初等教育資料9月号』2020
- 岩井智宏『「言葉がけ」のアイデア100』明治図書2021
- 高倉弘光「「学びの系統性」を子どもとともに更新していく」『教育研究1月号』2022